



タマヤ

金井美恵子

タマヤ

一九八七年十一月十日 第一刷発行

著者——金井美恵子

©Mieko Kanai 1987, Printed in Japan

発行者——加藤勝久

発行所——株式会社講談社

東京都文京区音羽一三三 郵便番号二三 電話東京〇三—九壺—二三（大代表）

印刷所——信毎書籍印刷株式会社 製本所——黒柳製本株式会社

定価——一一〇〇円

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。

送料小社負担にてお取替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは文芸図書第一出版部あてにお願いいたします。

目次

タマヤ 5

賜物 33

アマンダ・アンダーソンの写真 61

漂泊の魂 83

たまゆら 113

薬玉 149

「タマヤ」について 187

写真 装幀
山田 宏一 金井久美子

連作長篇小説

タマヤ

タ
マ
や

顔が大きくて丸い猫を入れた革製のリュックサックを背負って、二五〇ccのオートバイに乗ってアレクサンドルはやって来た。

びっくりした猫がパニック状態になって飛び出してしまわないように、顔だけ出してリュックの口の革ヒモを絞めて運んできたのだが、リュックのような細長い形態の袋に猫を入れるとなると、猫は後肢で立たされる姿勢になって、四つ脚の動物にとってまるで楽じゃないスタイルだったから、床におろしてヒモをゆるめたたん、白黒の大きなブチ猫は背中を低くして凄いい勢いで飛び出し、書き物机と椅子の間に走り込んで、前肢をびたっとそろえてすわると怯えた上目づかいで、じっとこちらを見つめていた。

びっくりして、なに？ この猫？ と言うと、アレクサンドルは猫の名前をきかれたと思
ったらしく、タマですよ、タマちゃん、と答え、ねえ、タマ、タマ、とタマに話しか
けた。

タマや、いい子、いい子、心配しなくてもダイジャブ、このお兄さんが面倒みてくれるか
らね。安心、安心。よかったね。

それからまたぼくに向って、ちょっとドスの利いた声で、あんたはいい人だから、タマを
ひきとってくれるよね、妊娠してる飼猫を捨てるような残酷な真似は出来ないよね？
と、凄んだ。

それとも、タマを孕はらませたのはぼくじゃないって、言いはって拒絶する？

それはあてこすりに間違いない言い方だったし、お腹の大きな猫をリュックに入れて連
れ歩いてアレクサンドルは、恒子さんのお腹の子の父親探しをしているのだろうと思って、
ぼくは、あのねえ、アレクサンドルくん、と言った。正直いって、ぼくには父親の資格はな
いと思うよ。

心配しなさんな、わかってるんだから。

わかってるって、何が？

あんたがアネキの子供の父親じゃないってこと、と彼はあっさり言い、ぼくは、ほっとする一方、やっぱり一種微妙で曖昧あいまいな気持ちになって、どうしてなんです？　と言った。あんたの子だと言われれば、ぼくはちゃんといつだって注意していたと抗弁してみたところで、何回か性交をしたのは事実だし——正確に言えば、最初の時はぼくの部屋で一回、次には彼女の部屋に泊った時、まさかピーコック・ストアの生理用品売場と洗剤売場の間に大きなカゴに入って既婚者たちの家族計画用の小ぎれいなチョコレートの箱とまぎらわしい徳用大箱を買ったりするわけではないけれど（あれにはぞっとするよ、キャベツやメリケン粉やおみや魚や肉やゴキブリ・フマキラーと同じ家庭用品）ジャケットの内ポケットに入れてあるコンドームを、ちゃんと使用したのだが、でも、その朝、二度目に少し寝ぼけたまま抱いた時には、ちゃんと使ったのかどうか記憶が曖昧で、それも無理がないと思う、今さらこんなことを言っても意味はないけれど、セックスというのは避妊のためにするわけではなくて、セックスをするのに避妊が要請されるわけで、おまけに性的欲望というのは（まあ、欲望というのはいつでもそうだけど）衝動的で、シソーローを病んでる口のなかみたいにネバネバしているからね。避妊は常に完璧というわけにはいかないのだ、と、机の下からソロソロと背中を低くしたままはい出して来て、見知らぬ部屋の匂いをフンフンかぎ回っている神経

質な様子の猫を見ながら思い、わかつてるって、何が？ と、もう一度口に出すと、アレクサンドルは、誰だっけいいんだけだねえ、ねえ、タマちゃん？ と言った。

父親が誰かってことに、おれは興味はないしね。あんた、ある？ そういうことに興味が？

うーん……とぼくは、口ごもり、彼は、こいつの、と猫をアゴでしゃくり、産んだ仔猫の父親のことまで気にする人間てのも、世の中にはいるね、毛並みの色や柄で、近くをうろつきまわってるオスの赤トラかキジ猫かなんてね、気にするのが、と言って笑った。毛並みの色で思い出したけど、見てのとおり、アネキとおれは父親ってものが違うしね、二人とも自分のオヤジの顔ってものを知らないからね、サバサバしたもんなのね。それに父親を探究してるわけじゃなくて、それについて、後で相談があるんだけど、とりあえず、あんたにタマの面倒をみてもらいたいんだな。妊娠したのがわかってさあ、こいつがいるとまずいって言うんで——ホラ、よく知らねえけど、こういった毛むくじゃらの生物には寄生虫がウジヤウジやって、ナントカジストマだかなんとかってのじゃないの？ ニンプのからだによくないって言うんだよな、奇型児が産れるってさ、おばさんが言うんだよ、そんなら、おばさん、タマを引きとってよ、タマも腹がでえんだけど、ナントカって寄生虫は猫自体には影

響ないのってきいたら、ないわよって言うんで、じゃあ、おばさんタマの面倒みてやってよってアネキも頼んだんだけど、あたし？　あたしは駄目、トラ年だから猫とは相性悪いもの、猫が育たないっていうのよ、トラ年は、だからさ、かあいそうじゃないタマに、だからね、駄目駄目、それより、カネミツちゃん（カネミツってのがおれの本名なんだよね）子供ん時から猫を飼いたがってたんだから、あんた飼ったげなさいよ、それがいいよ、そのかわり、ツネコちゃんの子供が産れたら、お店に出てる間あたしがみてやるからってんで、おれがタマを押しつけられちゃったんだけどね、どうした？　タマちゃん、お腹すいたのかい？　ちょっと、あんた、夏之さん、このカンヅメを開けてくんない？　こいつ、腹に子供がいるからね、いやあ、まったくよく喰うんだよね、と、アレクサンドルは、いつの間にかすり寄って来て黒い長い尾をユラユラと立て、頭をしゃくりあげるように彼の脚にこすりつけながらニャアニャアうるさく鳴いている猫の頭をなでながら、ほら、そのカバンにカンヅメと猫用トイレが入ってるから、あんたエサをやつてよ、早く仲良しになったほうがいいからね、と分別くさい真面目な顔で言った。早くしなよ、こいつ、腹が空いてるんだから。

しかたないので、ぼくはあわてて入口のドアの前に置いてある紺色の古びたビューマのスボーツ・バッグから、プラスチック製の猫用トイレとカンヅメとエサと水を入れるプラスチ

ツクの器を取り出し、カン切り、カン切り、と言いながら台所の引き出しと棚をひっかきまわし、そうだ、ビールでも飲むかい、とアレクサンドルに声をかけると、彼はああ、いいね、と言って勝手に冷蔵庫を開けてカンビールを取り出し、おやおや、スベア・リブがあるじゃないの、これ食べていいね、と言いながらオーブンにスベア・リブをつっ込み、カンビールのふたをプシュと開け、チュッチュッとそれが癖の舌で上あごをたたく耳障りな音をたて、エサを要求してニャアニャア鳴いていた、メスにしてはやけにデッカイ白黒のブチ猫は、ピツと耳を立ててヒゲをピクピクさせ、どこかにネズミがいるのでは？ という顔つきをし、アレクサンドルは、チュッチュッ、タマちゃん、きみはネズミ取りの名人だから、きつと夏之さんのお役にたてるねえ、チュッチュッ、と猫なで声で言い、なんだい、こりゃあ、と、答えも待たずにプレイヤーに置いてあったレコードに針をのせて、ヴォリュームをあげたので、カザルスの弾くチェロが大音響で鳴りひびき、タマは飛びあがり、ぼくはあわててヴォリュームをしぼった。

これじゃあ、まるでセロ弾きのゴーシュのセロのなかに入った小ネズミの気持が良くわかる、と言うと、アレクサンドルは、なに？ それ、と例によって質問し、なんでもないよ、と面倒くさそうに答えても、ちゃんとした説明を聞くまで満足しないので、ぼくはしかたな

く『ゼロ弾きのゴージュ』の物語を細かく説明し、彼が、ふーん、面白そうだね、読んでみようかな、その本、持ってる？ 持ったら貸してよ、と言うので筑摩版の全集の一冊を本棚から取り出して見せると、なんだよ、そんな簡単なスジの話が、なんでこんなに分厚い本になるんだよ、冗談じゃないよ、とっても読んでるヒマがありません、と言った。ネ、タマちゃん。

それで、その猫だけど、きみが飼うことになったんだろ？

そう。タマね。そうなんですけどね。

じゃあ、なんで連れてきたの？

そこそこ。

ずいぶん、可愛がってるみたいじゃないのよ？

そう、そう。そうなんだけどね、こいつ、頭もいいしね、おれのこと愛しちゃってるんだよね？ ニャア？ ニャアか？

そんじゃあ、なんでなんだよ。

うん。夏之さん、飼ってやってよ、おれ、時々、タマの様子を見に来るからさあ。

カンヅメをガツガツたいらげたタマは、ひょいと飛びあがってアレクサンドルの膝のうえ

に横たわって顔を洗いはじめ、やけに落ちつきはらっていた。

知ってるでしょ？ コレのところ、まあ、緊急避難することになってね——家賃滞納してたからね、夜逃げだよ——ところが、彼女、猫が駄目なのね、アレルギー、猫のぬけ毛でクシャミが出ちゃうし、シンマシンも出ちゃう、マズイよ、これは。猫をどっかにやってあんたが残るか、猫もあんたも一緒に出て行くか、どっちかにしてってことになっちゃった。女に惚れてるわけじゃないんだけどね、なにしろ、今のところ、てんでフトコロが不如意だから、お腹の大きい猫とおれとで行くところがないのよね。アネキは猫が駄目だし、もともとアネキが原因で引き受けることになった猫だろ？ おばさんも、猫と一緒に、カネミツちゃん、困るわよ、という具合だし、おふくろ？ あれっ？ 話しませんでしたか？ あれは去年の暮れだったかなあ、借金残したまま、店のパーテンとトンズラしちゃったんだよねえ。知ってるでしょ？ あの、ちょっとズレたおしゃれをするチンケ左翼で色男ぶった奴。あんたとケンカしたことあるじゃん？ それでね、夏之さんとこに、タマと一緒にしばらくやっかいになろうかとも思ったんだけど、両方じゃ困るっていうんだったらね、タマだけでも面倒みてやってよ。ね、ツネコの子供のみがわりだと思って。そういうことしとくと、後生がいいっていうでしょ？ 人助けだもん。猫助けでもあるしね。滅多に人にあずけられな